

接触場面と母語場面における 母語話者のくり返しの方法

— 日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルの観点から —

The Use of Repetition of Native Speakers in Contact and Native Situations

— Focused on Contact Experiences with Non-Native Speakers
and Interlocutor's Proficiency Level —

平山紫帆
HIRAYAMA Shiho

〔要旨〕

本稿は、接触場面と母語場面の初対面自然会話において、母語話者が使用する対話相手の発話のくり返しの「生起位置」と「形状」が、対話相手（中級学習者、上級学習者、母語話者）の日本語レベルと、母語話者の非母語話者との日常的な接触経験によって異なるかを探った。分析の結果、「生起位置」に関しては、①接触経験の多い母語話者は、相手の日本語レベルが低いほど「直後」のくり返しが多く、②中級学習者に対しては、接触経験が少ない母語話者よりも「直後」のくり返しを多用することが明らかになった。「形状」に関しても、①接触経験の多い母語話者は、相手の日本語レベルが低いほど、「再現型」のくり返しが多く、②中級学習者と話す場合、経験の少ない人に比べて、「再現型」のくり返しを多用することが判明した。接触経験を積んだ母語話者は、日本語のレベルの低い相手には明確なくり返しを使い、発話を「やさしい日本語」にしていると解釈できる。

〔Abstract〕

In this paper I examined whether repetition of “occurrence position” and “form” used by native speakers of Japanese changes according to the Japanese proficiency level of their interlocutors and to everyday contact experience of the native-speaker with non-native speakers, in contact and native situations where speakers meet for the first time.

Regarding the “occurrence position”, this paper clearly shows that (1) there is a higher occurrence of repetition “right after” for native speakers with more contact experience when talking to non-native speakers the lower their proficiency level is; and (2) that the same phenomenon also happens when talking to intermediate proficiency level speakers, when compared to native speakers with low contact experience.

As for the “form”, it is clear that (1) there is a higher occurrence of “replicative” repetition for native speakers with more experience the lower the proficiency level of the non-native speaker is; and that (2) the same occurs when they talk to intermediate proficiency level speakers, when compared to native speakers with low experience. From these, we can interpret that native speakers with more experience use “Easy Japanese” (yasashii nihongo) and

repetition with clarifying intent when talking to non-native speakers with low proficiency levels.

Key word: くり返し、日本語レベル、日常的な接触経験、やさしい日本語
repetition, Japanese proficiency level, contact experience, Easy Japanese



1. はじめに

日本政府観光局（JNTO）によると、2016年の訪日外客数（訪日外国人客数）は2,403万9千人に上り、前年比21.8%増と急激に増加している。また、法務省によると、2016年末現在の在留外国人は238万2,822人で、前年比6.7%増と、こちらも過去最高を記録している。このように、訪日外国人や在留外国人は近年増加し続けており、日本人が外国人と接する機会が増えている。その際、英語ではなく、日本語でコミュニケーションをする機会やニーズが増えており、日本語能力の限られた相手とコミュニケーションを行うための方策として、「やさしい日本語」への関心が高まっている（岩田2010）。母語話者が産出する日本語を「やさしい日本語」にするために、語彙を選択したり、文を短くしたりといった種々の方策が提案され、現在、様々な分野で実践が進んでいる。だが、現在のところ、その主な関心は文法や語彙といった言語的な面に向けられ、情報伝達の面には十分な関心が払われていない（野田2014）。また、「やさしい日本語」で想定されている対象者は、主に初級程度の非母語話者であるが、それ以上のレベルの人が問題なくコミュニケーションができていたとは限らず、現在の「やさしい日本語」の対象外にいる人が、何らかの「やさしい日本語」を必要としていることも考えられる。その場合、母語話者が、相手によって、「やさしさ」の度合いが調整できれば、より効率的なコミュニケーションが期待できるだろう。そのためには、日本語母語話者が相手に応じて日本語を調整する技術を持つことが求められる。

こうした母語話者の調整は、接触経験により異なることが指摘されているが、一つ一つのコミュニケーションの方策が接触経験によってどのように異なり、経験の多い人が実際にどのように使用しているかはまだ十分に明らかにされていない。しかし、接触経験の多い人と経験の少ない人との違いが具体的に明らかになれば、経験を積むことで得られる技能を知識として知ることができ、より実践的な「やさしい日本語」の解明や、今後の接触場面のコミュニケーション教育に役立てられると考えられる。そこで本稿では、母語話者の調整行動としてくり返しに焦点を当てる。くり返しは、明確な情報伝達や対人関係の構築に寄与する方策であり、情報伝達が重要な「やさしい日本語」において、重要な開発の要素となると考えられるからである。したがって、本稿ではくり返しに注目し、接触経験と対話者の日本語レベルによって、母語話者が具体的にどのようにくり返しを使用しているかを明らかにする。

2. 先行研究

2.1 やさしい日本語

「やさしい日本語」には、大別すると、減災を目的としたもの（弘前大学社会言語学研究室 2013）、定住外国人などの言語的マイノリティに対する言語保障のためのもの（庵 2009）があり、一言に「やさしい日本語」と言っても、その想定する対象者やアプローチの方法は一様ではない。しかし、これらには、「日本語に堪能でない外国人を対象に、日本人が有する情報（災害時の情報、行政上の情報など）を不特定多数の外国人にわかりやすく伝える、という共通の目的」（義永 2015:25）があり、主に「言い換え」「書き換え」に焦点が当てられている。ここで想定されている情報の流れは一方的で、対話相手の存在する場面で、双方向の情報のやり取りをするための「やさしい日本語」という視点がまだ不十分であると言える。野田（2014）が指摘しているように、今後は語彙や文法といった言語的な側面だけでなく、情報の取捨選択や伝達方法といったコミュニケーション的側面にも目を向けていく必要がある。

2.2 接触経験の調整行動に及ぼす影響

母語話者が非母語話者に対して行う調整行動に、非母語話者との接触経験が与える影響を扱った研究には、村上（1997）、増井（2005）、筒井（2008）、柳田（2015）等がある。

村上（1997）は、非母語話者との接触経験の度合いが異なる母語話者に、非母語話者との双方向のインフォメーションギャップのタスクを行わせ、その過程で見られる「意味交渉」の方法の頻度を見ることで、接触経験の影響を分析した。その結果、最も意味交渉の頻度が高かったのは、日本語教師ではないが、事務的な職務上、非母語話者と日本語による接触を頻繁に行う母語話者であることが明らかになった。村上はそうした母語話者は、普段から「本当に意味のあるコミュニケーション」をしているために、意味交渉の方法に長けていると分析した。

増井（2005）は、母語話者に、初対面の非母語話者との描画タスクを短期間に連続して5回行わせ、その1回目と5回目で、意味交渉における母語話者の修復的調整がどのように変化するかを分析した。その結果、5回の接触経験を積んだ後は、修復的調整が頻繁に行われるようになり、調整方法の種類も増加することが明らかになった。そのうち、くり返しに関しては、「そのままの繰り返し」が減少し、新たな要素が付加された「加工された繰り返し」が増加することも明らかになった。

筒井（2008）は、接触経験の異なる母語話者に、非母語話者とのロールプレイを行わせ、日本語母語話者向けに書かれた文書を、母語話者が非母語話者に対してどのように言い換えて説明するかを分析した。その結果、接触経験の少ない母語話者は、与えられた情報に依存して説明を行うが、接触経験の多い母語話者は、得た情報を一旦消化してから、非母語話者の理解度に応じて再構成する傾向があることが明らかになった。

柳田（2015）は、接触経験の異なる母語話者と非母語話者に、ビデオの前半と後半を別々に

視聴させたのち、お互いに持っている情報を交換して情報を完成させるというタスクを行い、コミュニケーションの方略に接触経験がどのように関わるかを詳細に分析した。その結果、接触経験の多い母語話者は、情報を与える側の場合に、①情報の切れ目が明確な文単位の発話を多用する、②理解チェックによって相手の理解を躊躇なく確認する、③自発的に発話修正を行う、という方略を行っており、情報を受け取る側の場合には、①意識的なあいづちの多用、②理解表明と理解あいづちの併用、③くり返しによる情報内容の確認、③積極的かつ自信のある共同発話の使用、という方略を用いることが明らかになった。

以上の研究からは、接触経験を重ねることで母語話者が調整の方法を変化させることが明らかになり、くり返しに関しても、その使用法に接触経験が影響することが示されている。しかし、接触経験と非母語話者の日本語レベルとを関連付けて分析したものは管見の限り見られない。また、上記の研究はロールプレイやタスクという目的が明確な会話を対象としており、その結果が自然な自由会話にも適用できるかは明らかにされていない。

2.3 日本語の談話におけるくり返しの研究

日本語の談話におけるくり返しについては、これまで数多くの研究がなされてきたが、代表的なものに中田（1992）が挙げられる。中田（1992）は、雑誌に掲載された話し言葉の文字化資料をデータとし、くり返しを①誰の発話のくり返し、②出現のタイミング、③形状、④機能、の観点から分類し、①～③のタイプによって機能や表現効果がどのように異なるかを分析した。その結果、（1）自分の発話のくり返しには一方的な表出のはたらきが、他者の発話のくり返しには相互作用的な性格が強い働きが主に見られる、（2）元の発話の直後に用いられるくり返しは反射的で、相手への反応や感情の動きを生き生きと表し、テンポのよいやりとりに貢献するのに対し、間をおいたくり返しは、会話の進行や相手の反応を見ながら行われ、より冷静な方略として使用されることが多い、（3）再現型のくり返しは発話間の結びつきや共感を示すのに適すが、一部を変更したり補足したり言い換えるタイプのくり返しは、理解補助的なくり返しとしての使用に効果的であることなどを明らかにした。

同様に、くり返しの形状に着目したものには、杉山（2002）がある。杉山は、対談、実演、講義の3タイプのテレビ番組をデータとし、それぞれの談話に現れるくり返しの「形状」と「タイミング」と「機能」の関係を分析した。その結果、再現型を直後にくり返す場合には心情的な表出が見られたり、補足型でくり返しの後に話が続いていく場合は話題の展開の機能を果たすなど、くり返しの形状やタイミングなどにより機能が異なることが明らかになった。

一方、接触場面における日本語のくり返しを扱った研究には、上述の増井（2005）、柳田（2015）の他、堀内（2001）、岡部（2003）、永田・大浜（2011）等がある。

堀内（2001）は、母語場面と接触場面の初対面会話を用いて、母語話者と非母語話者のくり返しの比較を行った。そして、母語話者同士の場合には「強調」や「確認要求」が多いのに対して、非母語話者は「説明要求」のくり返しが多いことや、初級と中級の非母語話者ではその使用

状況が異なり、中級では「間つなぎ・時間稼ぎ」などの使用が多いことなどを明らかにした。

岡部（2003）は、ゲームを使用した課題解決場面の会話をデータとし、そこで使用されるくり返しがどのような機能を持つか、そして、母語場面と接触場面で違いがあるかを分析した。その結果、母語場面では、思考や感情という「内側の認識」を共有するくり返しが多く、それにより人間関係を調節しながら課題解決を行うのに対し、接触場面では情報の共有や感情の共有を行うくり返しが多く、それらによって互いの関係を調節していると分析した。

これらの研究が主に機能に焦点をあてているのに対し、永田・大浜（2011）は、道聞き談話をデータとして、その談話中のくり返しと言い換えの使い分けが、母語話者と日本語学習者でどのように異なるかを、①出現環境、②生起位置、③受け手の反応、の観点から分析した。その結果、①の出現環境に関しては、母語話者の場合、道聞きの中で相手から与えられた情報によってくり返しと言い換えを使い分けているが、日本語学習者は自分の判断により使用している、②の生起位置は、母語話者は相手の発話直後にくり返しや言い換えを使用するが、日本語学習者の場合には自身が必要と判断した際に使用することも多い、③の会話相手の反応に関しては、日本語学習者がくり返しや言い換えを行った場合、対話相手の母語話者は、情報の理解が足りなかったためくり返したと判断し、さらに反復をしたり説明を加えたりして、情報を確かになしようとする傾向があることが明らかになった。

くり返しの使用実態を明らかにするためには、機能だけでなく、永田・大浜（2011）のように、どのような時にどのような方法でくり返しを使用するかを明らかにすることが重要であると思われる。永田・大浜（2011）は、道聞き談話での母語話者と非母語話者の比較を行っているが、接触場面での自由会話において、母語話者がくり返しをどのように使うかを調べる必要がある。また、永田・大浜（2011）では、母語話者が情報によってくり返しと言い換えを使い分けていることが指摘されているが、中田（1992）や杉山（2002）に見られるような、その他の形状を母語話者がどのように使い分けているかは明らかでない。

3. 研究課題

以上の先行研究を踏まえ、非母語話者との日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルにより、母語話者のくり返しの使用法に違いが見られ、それがどのように「やさしい日本語」に寄与するかを明らかにするために、永田・大浜（2011）を参考に、以下の研究課題を設定する。

RQ：母語話者の非母語話者との接触経験や対話相手の日本語レベルによって、母語話者のくり返しの使用法には違いがあるか

- (1) 母語話者のくり返しの生起位置に違いがあるか
- (2) 母語話者のくり返しの形状に違いがあるか

4. 研究方法

4.1 くり返しの範囲

くり返しの研究はこれまで数多くなされてきたが、「くり返し」の定義や当該研究でどこまでを対象とするかは、研究者の関心や問題意識によって異なり、一様ではない。

本稿は、中田（1992）にならい、くり返しを「既に発話されたことを再び発話すること」と定義する。

本稿で対象とするくり返しの範囲は、中田（1992）を参考に、「先行発話が対話相手の発話として同一会話内で特定できるもの」（例1参照）とし、先行発話が自分の発話であったり（例2参照）、自分の発話か対話相手の発話かの判断できなかつたりするものは、今回は対象から外す（例3参照）。また、質問に対する応答の中で使用されるくり返しは、情報構造上、義務的なものも存在し（甲斐 2000）、必ずしも話者の選択によって使用されているとは限らないと解釈し、本稿では対象に含めないことにする（例4参照）。元の発話の再現の厳密性については、「一言一句違わぬ再現だけでなく、意味を保持した言い換えや要約も、下敷きとなった発話が特定できればくり返し」（中田 1992:271）とした中田（1992）と同様、対象を広く設定する。そして、元の発話とほぼ同じ形のままくり返すものだけでなく、発話の一部を多少変更したり、要素を補足したりするもの、そして、元の意味を保持した言い換えも対象に含めることにする（4.3.2参照）。

（例1）（下線部は先行発話、太字はくり返しを示す。以下同様。）

A¹⁾：でも高校の英語難しいよね²⁾。（←先行発話）

B：**難しいです**よね<二人笑い>。

（例2）

B：難しいよね。難しいでしょ、日本語。（←自分の発話のくり返しなので対象外）

（例3）

B：去年の10月、あ（うん）、そろそろもしかしたら帰国が近いですか？。

A：ん帰国？。

B：帰国。（←先行発話が自分の発話か対話相手の発話か特定できないので対象外）

（例4）

A：今いち、1年生？、<2年生> {<}？。

B：<今> {>}、1年生。（←質問への返答で質問をくり返しているものは対象外）

4.2 データの概要

日本語母語話者 8 名が、日本語中級学習者、上級学習者、及び日本語母語話者と一対一で行った初対面会話（計 24 会話）のうち、開始から 10 分間、計 240 分間を宇佐美（2007）に従い文字化したものを本稿のデータとする。

本稿は母語話者の発話の調整の仕方に関心があるため、分析対象とするのは母語話者 8 名の発話とする。この母語話者は、都内の大学や大学院に在籍する 20 歳～23 歳の日本語母語話者の女性である。そして、このうちデータ収集時点で、日本語による特定の非母語話者との接触が週に 1 度以上あり、それが半年以上継続している人を「接触経験の多いグループ」（4 名）、そうした接触経験がないか、過去に経験していたとしても、接触のない期間が調査時点で 3 年以上継続している人を「接触経験の少ないグループ」（4 名）とした。

対話相手は、都内の大学及び大学院に在籍する学生（平均年齢 22.7 歳）で、相手による違いが生じないようにするために、学習者の国籍は台湾で統一し、中級学習者、上級学習者、日本語母語話者の計 3 名は固定した。つまり、分析対象の母語話者 8 名の対話相手は同一であるということである。学習者の日本語能力は、日本語中級クラスに在籍する交換留学生を中級学習者、大学院で日本語を研究する大学院生を上級学習者とみなすことにした。

会話の話題は特に指定せず、自由に会話をするように依頼した。

4.3 分析方法

4.3.1 くり返しの生起位置

本稿は、中田（1992）、永田・大浜（2011）を参考に、母語話者のくり返しを①直後、②非直後に分類する（表 1）。

表 1 くり返しの生起位置

	定 義	例
①直後	元の発話にすぐ続くもの	A：んん、三日じゃない、に、 <u>二</u> 回。 B： <u>二</u> 回ぐらい。
②非直後	元の発話が提示された後、他の発話（あいづちを除く）が挟まれてから生起するもの	A：あー、でも台湾は 2 月と 4 月の人は <u>同じ</u> 、学年。 B：4 月？。 A：ん、ん、2 月と 7 月。 B：7 月。 A：はい。 B：んー <u>同じ</u> 学年ですか？。 A：はいはい。

4.3.2 くり返しの形状

本稿は、中田（1992）を参考に、母語話者のくり返しを①再現型、②一部変更型、③補足型、④言い換え型に分類する（表 2）。

表2 くり返しの形状

	定 義	例
①再現型	ほぼ同じ形でくり返したもの	A: じゃあ開かずの、<部屋だったと> {<>}。 B: <開かずの> {>}。 B: ちょっと入ってみたい感じで (んー)。
②一部変更型	多少の変更を加えたもの	A: テストは先週もう全部終わり。 B: 終わったんですか?。
③補足型	くり返す際に情報を追加したもの	A: うん、そんな、偏りが (へーえ) あったけど。 B: あでも「大学名」でも偏りは (んー) かなりある。
④言い換え型	意味を保持して言い換えたもの	A: あでも男っぽくない?。 B: 男前で (<笑い>)。

5. 結果

5.1 くり返しの生起位置

今回のデータは総発話文数 5,641、そのうち母語話者は 2,751、対話相手は 2,890 であった。くり返しに関しては、合計 350 (接触経験が多いグループ 200、少ないグループ 150) のくり返しを得られた。

これらのくり返しのうち、「直後のくり返し」は 314、「非直後のくり返し」は 36 であった。図 1 と図 2 に、接触経験が異なる母語話者が、中級学習者、上級学習者、母語話者との会話で使用した「直後のくり返し」と「非直後のくり返し」の生起数の平均を示す。これを見ると、図 1 の直後のくり返しについては、接触経験の多い母語話者は、中級学習者に対して平均 21.3 回、上級学習者には 14.8 回、母語話者に対しては 9.5 回のくり返しを使用しており、対話相手の日本語力が上がるにつれて、その使用数は次第に減少していることがわかる。しかし、接触経験の少ない母語話者の場合、対話相手ごとの平均値に、大きな違いが見られない。さらに図 2 の「非直後のくり返し」を見ると、接触経験の多い母語話者は中級学習者に最も多く使用しているが、経験の少ない母語話者は上級学習者に対する使用数が最も多い。

そこで、こうした差に統計的な有意差があるかを確認するために、「接触経験 (2 水準) × 対話相手 (3 水準)」の 2 要因分散分析を行った。その結果、「直後のくり返し」は、接触経験と対話相手の交互作用 ($F(2,12) = 7.191, p < .01$) と対話相手の主効果 ($F(2,12) = 14.489, p < .001$) が見られた。単純主効果検定およびライアン法による多重比較検定の結果、①接触経験の多い母語話者は、対話相手の日本語レベルが低いほど、直後のくり返しを多用する ($p < .05$)、②対話相手が中級学習者の場合に、接触経験の多少による差が見られ ($p < .05$)、接触経験の多いグループの方が直後のくり返しが多い、ということが明らかになった。

一方、「非直後のくり返し」については、「接触経験」と「対話相手」の交互作用や主効果は確認できなかった。

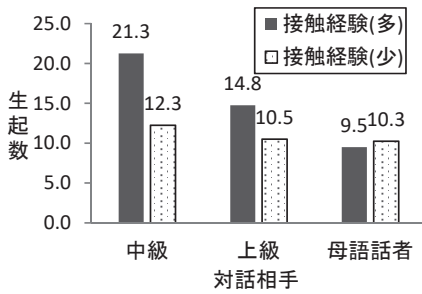


図1 直後のくり返し (平均)

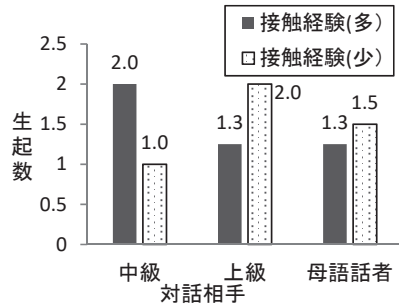


図2 非直後のくり返し (平均)

5.2 くり返しの形状

本稿のデータで得られたくり返しを形状ごとに分類したところ、「再現型」が159、「一部変更型」が86、「補足型」が31、「言い換え」が74得られた。

これらについて、接触経験や対話相手の日本語レベルによる違いがあるかを見るために、形状ごとに「接触経験 (2水準) × 対話相手 (3水準)」の2要因分散分析を行った。その結果、「再現型」は、接触経験と対話相手の交互作用 ($F(2,12) = 6.208, p < .01$) と対話相手の主効果 ($F(2,12) = 15.479, p < .001$) が見られた。単純主効果検定およびライオン法による多重比較検定の結果、①接触経験の多いグループは、対話相手の日本語力が低いほど、有意に多くの「再現型」のくり返しを使用している ($p < .05$) こと、②中級学習者と話す場合に、接触経験の多いグループは、経験の少ないグループよりも有意に多くの「再現型」のくり返しを使用する ($p < .05$) ことが明らかになった (図3)。

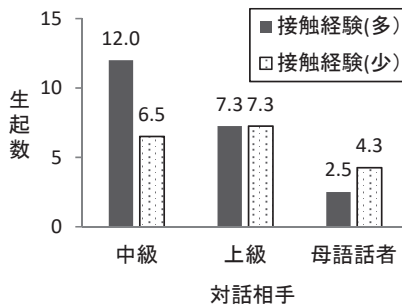


図3 「再現型」のくり返し (平均)

「一部変更型」「補足型」「言い換え型」では、「接触経験」と「対話相手」の交互作用および主効果が確認できなかった。

6. 考察

本稿の分析結果をまとめると、「くり返しの生起位置」(RQ1)に関しては、①接触経験の多い母語話者は、相手の日本語レベルが低いほど、「直後」のくり返しが多く、②中級学習者が相手の場合に接触経験の差が見られ、経験が多いグループの「直後」のくり返しが多い、ということが明らかになった。また、「くり返しの形状」(RQ2)に関しても、同様に、①接触経験の多い母語話者は、相手の日本語レベルが低いほど、「再現型」を多用し、②中級学習者と話す場合、接触経験の少ない人に比べて、「再現型」のくり返しが多い、ということが明らかになった。

そこで、以下では、接触経験の多い母語話者が相手の日本語レベルが低いほど「直後」と「再現型」のくり返しを使用することについて、本稿のデータで得られた特徴的な例を見ながら、それぞれ分析する。そして、接触経験の多寡がくり返しの使用に影響を及ぼす理由について考察する。

まず、接触経験の多い母語話者が、日本語レベルの低い相手に「直後」のくり返しを多用するのはなぜかを見ていく。

会話例1 (NNM：中級学習者、BA03：接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	生起位置
1	BA03	どんな感じ？<笑い>、日本は1年いて(うん)。	
2	NNM	楽しかった<笑い>。	
3	BA03	楽しかった？。	直後
4	NNM	毎日遊びばかりだったから<二人笑い>。	
5	NNM	勉強してない、<全然> {<}。	
6	BA03	<してない> {>}。	直後
7	NNM	うん、で、いろいろ友達、できた。	
8	BA03	そう(うん)だね。	
9	NNM	楽しかった、うん。	

会話例1では、中級学習者NNMによる2「楽しかった」と5「勉強してない」という発話を、接触経験の多い母語話者BA03が直後にくり返し、その後は、NNMが新しい情報を提供している。これを見ると、NNMの発話は短いものであるが、くり返しによって次の発話が促され、会話がスムーズに進展しているように見える。大浜(1998)は、日本語母語話者は相手にターンを譲渡する際、くり返しを好む傾向があると指摘しているが、相手にターンが移るということは、くり返すことによって、相手の発話を促せるということである。日本語のレベルが低い非母語話者の場合、上の例のように一つ一つの発話が短くなりやすく、必要な情報が十分に伝えられないことがあるが、そうした非母語話者の発話の直後にくり返しを入れることで、ターンを非母語話者にすぐに戻せれば、更なる情報提供を相手に促すことができるのではないだろうか。したがって、直後の発話のくり返しは、日本語のレベルの低い非母語話者に対しては特に有効な方法であると考えられる。

また、会話例1のくり返しは、先行発話の直後に現れ、あいづちのような機能を果たしているが、短いくり返しを発話の直後に挟むことで、全体としてテンポよく楽しそうに会話が進んでいるようにも見える。中田（1992）は、元の発話の直後のくり返しは相手への反応や感情を生き生きと表せると指摘しているが、この例でも、くり返しによって中級学習者 NNM への共感や関心を示していると考えられる。非母語話者の日本語のレベルが低い場合、日本語で会話を続けることは心理的な負担が大きいと考えられるが、母語話者はそうした直後のくり返しを挟むことで、非母語話者が発話をしやすくしているのではないだろうか。したがって、このくり返しは、日本語レベルの低い非母語話者にとって、「やさしい」方法であると言える。

非母語話者の心理的な負担を軽減するくり返しであると解釈できるものには、他のタイプもある。

会話例2（NNM：中級学習者、BA05：接触経験の多い母語話者）

	話者	発話内容	生起位置
1	NNM	あでも皇居、皇居<よね> {<}。	
2	BA05	<皇居> {>}、<うん> {<}。	直後
3	NNM	<皇居> {>} は、行ったことあるけど入らなかった。	

会話例2では、1で中級学習者 NNM が「皇居」をくり返し、確認要求の発話をしているのだが、母語話者 BA05 はその発話を聞き終わらないうちに NNM の発話をくり返し、確認を与えている。そして、確認を得た NNM は、BA05 の「うん」を聞く前に、発話を続けている。この例において、NNM は、産出に不安のあった「皇居」という語を BA05 にくり返してもらうことにより、安心して話を先に進めているように見える。こうした意味交渉は、非母語話者の日本語レベルが低いほど頻繁に行われるが、非母語話者からの確認要求の直後にくり返しを行い、確認が与えられれば、非母語話者の不安を即座に解消することができるのではないだろうか。

以上のように、「直後」のくり返しは、相手の発話を促進し、心理的負担を軽減する効果があるため、日本語レベルの低い相手に多く使用されたのではないかと考えられる。

次に、くり返しの形状の「再現型」について見ていく。接触経験の多い母語話者が、日本語レベルのより低い相手に「再現型」のくり返しを使用するのはなぜだろうか。

会話例3（NNM：中級学習者、BA02：接触経験の多い母語話者）

	話者	発話内容	形状
1	NNM	しかもあの、書く、の、書く、え、レポートを書くのはあまり、とく、え、得意じゃない？。	
2	BA02	得意じゃない。	再現型
3	NNM	ん。	
4	BA02	じゃ卒論は書かないんですか？。	
5	NNM	でも向こうは卒論書かなくても卒業できる<から> {<}。	

会話例3では、中級学習者 NNM の1の「得意じゃない?」という確認要求を、母語話者 BA02 が2で「得意じゃない」とくり返している。このように、相手からの確認要求に答える場合には、くり返しの形状を言い換えたり補足したりするのではなく、そのままの形式を使用したほうがより早く反応することができる上、話者の発話が正しいというシグナルを送ることもできる。したがって、このようなくり返しは、非母語話者に「やさしい」発話であると言える。

会話例4 (NNM: 中級学習者、BA02: 接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	形状
1	BA02	あーそしたらに、そしたら [↑] 2月7月ということは、(ん) 学年は、違いますね、日本だと。	
2	NNM	ん、そう、あー [驚いた様子で]。	
3	BA02	4月に区切れるので。	
4	NNM	あー、でも台湾は2月と4月の人は同じ、学年。	
5	BA02	4月? 。	再現型
6	NNM	ん、ん、2月と7月。	
7	BA02	7月。	再現型
8	NNM	はい。	

会話例4は、自分たちが同じ年齢であるということを知り、誕生月を聞き合った直後のやり取りである。1からわかるように、接触経験の多い母語話者 BA02 は、お互いの誕生月は「2月と7月」だと認識していた。ところが、中級学習者 NNM が4で「2月と4月」と発言したため、BA02 は、直後の5で「4月」をそのままの形で聞き返した。高木・細田・森田(2016)は、このような対話相手が修復を開始する「他者開始修復」には、問題源を特定する力の異なる複数の技法があるが、そのうちくり返しを行う方法を用いると、厳密に問題点を特定できると述べている。上記の例でも、「4月」をくり返すことで、BA02 は NNM に自分自身の聞き取りを示しているが、それを問題源と同じ形で示すことにより、理解上の問題が起きた場所をより明確に相手に伝えている。さらに、5の聞き返しに、6で NNM が「2月と7月」と言い直すと、BA02 は7で「7月」の部分をくり返している。ここでも、相手が修正した箇所を、そのままの形でくり返すことによって、BA02 は、今問題になっている部分の自分の聞き取りを、はっきりと相手に伝え、相手が確認しやすくしている。こうした手法は、とりわけ日本語力の低い相手には有効であり、「やさしい」方法であると言える。

また、前出の会話例1では、直後のくり返しが相手の発話を促している様子が見られたが、相手の発話を再現したくり返しは、相手が情報を処理するための認知的負荷が低く、「やさしい」発話である。こうした再現型は、相手の思考を妨げにくいと考えられるため、特に日本語のレベルの低い相手に発話を促す際には有効な手段であると考えられる。

では、このようなくり返しの使用法に、接触経験の多寡が影響を及ぼすのはなぜであろうか。

柳田（2015）は、接触経験を積んだ母語話者は、非母語話者から情報を受け取る際、①積極的に理解を明示し、②受け取った情報を再確認するとともに、③非母語話者が困っていることを察知し援助することができるようになる」と述べている。③からは、「接触経験の多い母語話者は、非母語話者の理解の程度がわかり、それに応じて行動ができるようになる」という解釈が導けると思われる。今回、接触経験の多い母語話者が相手の日本語レベルに応じてくり返しを柔軟に使い分けていたのは、そのためであり、より援助の必要な低い日本語レベルの相手に対し、「直後」「再現」のくり返しという明示的な形で理解を示し、援助をしていたのではないだろうか。

また、「ターンの譲渡」の観点から考えると、日本語力の低い相手にターンをスムーズに譲渡するためには、相手にその意図を明確な形で端的に伝えることが必要であると考えられる。柳田（2015）は、接触経験を積んだ母語話者は、非母語話者に情報を伝達する際、より簡潔な伝達手段に移行するようになる」と指摘している。接触経験の多いグループが、中級学習者に「直後」「再現」のくり返しを多用したのは、こうした簡潔なくり返しが伝達に有効であることを経験により学んだためではないだろうか。

なお、接触経験の多い母語話者が再現型を使用するという今回の結果は、接触経験を重ねると「そのままのくり返し」が減少し、「加工されたくり返し」が多くなるとする増井（2005）の結果と矛盾するようにも見える。だが、増井（2005）のデータは描画タスクにおける会話であり、かつ修復的調整に現れるくり返しに対象を限定している。こうした談話の性質の違いが結果の違いに表れているのかもしれない。

7. 今後の課題

以上の結果から、非母語話者との接触経験や対話相手の日本語レベルにより、母語話者のくり返しの用法には違いがあり、接触経験を積んだグループの方は日本語のレベルの低い相手に対し、「直後」「再現型」の明確なくり返しを使用し、発話を「やさしい日本語」にしていることが明らかになった。これは、語彙や文法を「やさしく」しなくとも、くり返しによって「やさしい日本語」にすることができるということである。そして、接触経験の多い母語話者は、経験を通してその方法を学び、相手に応じて使い分けていると解釈できる。これらの結果は、「やさしい日本語」をコミュニケーション的側面から考える上で重要な結果であると考えられる。

本稿では以上の結果を得たが、残された課題も多い。まず、今回は、生起位置と形状について別々に分析を行った。より詳細な分析のためには、両者を関連付けた分析が必要である。また、今回は対象を女性に限定し、対話相手の非母語話者も台湾人で統一した。母語話者の使用する「やさしい日本語」を考察するためには、対象を広げ、更なる分析が必要である。また、今回は他者の発話のくり返しに限定して分析を行ったが、自分の発話のくり返しに関しても、やさしい日本語の観点から考察する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿の例は A：対話相手、B：母語話者である。
- 2) 本稿の例で用いた主な記号は以下の通りである。(宇佐美 2007 による)
 - 。 1 発話文が終了したことを示す。
 - ?。 質問や確認の発話文が終了したことを示す。
 - < > {<} <> で囲まれた部分が、他者に発話を重ねられた部分であることを示す。
 - < > {>} <> で囲まれた部分が、発話を重ねた部分であることを示す。
 - () 相手の発話に重なる、短く、特別な意味を持たないあいづちを示す。
 - < > 笑いながら発話したものや笑い等の説明を記す。
 - [↑] 特記する必要があるイントネーションを表す。

参考文献

- 庵功雄 (2009) 「地域日本語教育と日本語教育文法：『やさしい日本語』という観点から」『人文・自然研究』3、126-141.
- 岩田一成 (2010) 「言語サービスにおける英語志向：『生活のための日本語：全国調査』結果と広島
の事例から」『社会言語科学』13 (1)、81-94.
- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:
BTSJ) 2007 年 3 月 31 日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究と
マルチメディア教材の試作』平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B (2) (研究代表者
宇佐美まゆみ) 研究成果報告書.
- 大浜るい子 (1998) 「日本人の言語行動：談話展開のためのストラテジー」『広島大学日本語教育
学科紀要』8、97-105.
- 岡部悦子 (2003) 「課題解決場面における『くり返し』」『早稲田大学日本語研究教育センター-紀要』
16、97-116.
- 甲斐ますみ (2000) 『日本語の省略現象』大阪外国語大学 博士論文.
- 杉山ますよ (2002) 「くり返しの形状・分布と機能」『別科論集』4、67-87.
- 高木智世・細田由利・森田笑 (2016) 『会話分析の基礎』ひつじ書房.
- 筒井千絵 (2008) 「フォリナー・トークの実際：非母語話者との接触度による言語調整ストラテジ
ーの相違」『一橋大学留学生センター紀要』11、79-95.
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」国立国語研究所 (編) 『国立国語研究所報告 104
研究報告集 13』、267-301.
- 永田良太・大浜るい子 (2011) 「道聞き談話における日本語母語話者と日本語学習者の言語行動の
比較」『教育学研究ジャーナル』8、41-50.
- 日本政府観光局 (JNTO) 「2016 年国籍別 / 目的別訪日外客数 (確定値)」
< www.jnto.go.jp/jpn/statistics/tourists_2016df.pdf > (2017 年 12 月 10 日)
- 野田尚史 (2014) 「『やさしい日本語』から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へ」『日
本語教育』158、4-18.
- 弘前大学社会言語学研究室 (2013) 「増補版「やさしい日本語」作成のためのガイドライン」
< <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/ej-gaidorain.pdf> > (2017 年 12 月 16 日)
- 法務省入国管理局 「平成 28 年末現在における在留外国人数について (確定値)」

- < http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00065.html > (2017年12月10日)
- 堀内奈美(2001)「会話における『くり返し』の発話について」『龍谷大学国際センター研究年報』10、19-32.
- 増井展子(2005)「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化-共生言語学習の視点から」『筑波大学地域研究』25、1-17.
- 村上千代(1997)「日本語母語話者の『意味交渉』に非母語話者との接触経験が及ぼす影響:母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて」『世界の日本語教育・日本語教育論集』7、137-155.
- 柳田直美(2015)『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略——情報やりとり方略の学習に着目して——』ココ出版.
- 義永未央子(2015)「日本語教育と『やさしさ』——日本人による日本語の学び直し——」義永未央子・山下仁(編)『ことばの「やさしさ」とは何か——批判的社会言語学からのアプローチ——』第1章、三元社、19-43.